

## 母系的な価値観への回帰にむけて先頭に立つ部族の女性たち

### スワプナ・マジウムダールさん (インド)

不可触民とされたコラガ族は、インドの南に位置するカルナータカ州の中でも最も取り残された部族として、社会的にも経済的にも非常に困窮した事態に直面していました。文明化されなかったこの部族は、何代にもわたって先祖が築き上げた林地を奪われ、竹や森に茂るつるで籠を編んだり、ごみあさりをして何とか日々の生活をしのいでいました。栄養失調、貧血、難病などにより、コミュニティの死亡率は非常に高い数字でした。この部族の人口が 15,146 人までに減少してから 4 年が経った 1986 年に、政府はコラガ族を特に脆弱な部族と認め、これにより部族の人々は各種の特別給付を受けられるようになりました。

社会文化的な苦境を乗り越えて尊厳ある生活を送ることができるよう、NGO や政府もコラガ族を支援しました。しかしながら、この難題に立ち上がったのはコラガ族の女性たちでした。こうした女性たちは、コラガ族が自らの土地や暮らしに対する権利を求める闘いや、自らの文化的アイデンティティを主張する上で、最前線に立っています。また、これにとどまらず、母系的な制度における先進的な価値観への回帰にむけても先頭に立っています。

そうした女性の一人がゴウリ・ケンジュールです。コミュニティを代表する公認団体であるコラガ・フェデレーションにおいて、彼女はまずは事務局長を 2 年間務め、その後、2006 年には初の女性総裁に選出されました。「私だけでなくコラガ族の全ての女性にとって大きな出来事でした。私たちの能力が認められたのです。」とゴウリは言います。実際、二度にわたり総裁に選出された唯一の女性であり、2006 年に続き 2007 年にも選出されています。現在は総裁ではありませんが、積極的に声を挙げて現在もキャンペーンを展開する彼女は、リーダーとして重要な役割を果たしています。

総裁としてゴウリが推し進めたことは、コミュニティ出身の女性の活躍の拡大であり、こうした女性に対して自らの権利のために戦うよう彼女たちに促しました。地元の NGO の研修を受けた女性たちは自分に自信を持つようになり、自分たちの資産を管理下におくための自助グループ(SHG)を結成しました。

自らの権利を意識するようになった結果、42 名を越える SHG の女性のメンバーたちが座り込みストを実施しました。これを受けた地元政府のトップは、子どもの教育や飲み水に関してこうした女性たちが提案した内容に沿って、アクションプランを展開することに同意しました。

また、彼女たちは女性のエンパワーメントを実現する、伝統的な母系的価値観の復活を目指しています。コラガ族には誇りにすべきことがたくさんある、とコラガ族の女性グループのリーダーを務めるシャシカラは言います。男児のほうが好まれ、出生の前の段階で女兒が殺されてしまうインドの他の地域と違って、コラガ族では女兒の誕生も祝福されます。持参金制度

もありません。もっと重要なことに、夫が亡くなった女性を形容する単語がありません。つまり父系社会でそうした女性が経験する不名誉が排除されているのです。

エンパワーメントが行われているコラガ族の女性たちは、伝統的な社会規範を打ち破ることでお手本となっています。例えばマンジュラは、暴力を振るう夫の元を結婚して9年後に去り、再婚しました。スシラは勉強することを優先させるために婚約を解消しました。婚約した時、彼女は8年生でした。大学院を修了した初の村の女性として、スシラはコミュニティ内の他の少女たちのロール・モデルとなっています。「今も独身ですが幸せです。私たちの母系的社会では、あらゆる問題に関する選択の自由が女性にはあり、そうした自由を私たちは強化していかなければなりません」と彼女は言います。

8年生を修了した後に結婚するために勉強を辞めてしまったママタは、現在、彼女の3人の子どもの全員にできるだけの教育の機会を与えようと躍起になっています。コスチューム・ジュエリーの制作および販売で得た自分の収入を、ママタは子どもたちの教育の継続に費やしています。「結婚は後でもできますよ」と彼女は言います。

途中まで教育を受けているママタは、自分の権利について理解しています。0歳から6歳を対象として政府が運営する近くの児童センターに登録し、彼女の4歳の娘がこうした権利を受けられるようにしています。こうしたセンターでは、栄養補助食品が支給されたり、正式ではないものの学校前教育が受けられたりします。さらに栄養や健康に関する教育、そして予防接種や健康診断が行われます。ママタの娘はこのセンターでは唯一のコラガ族の子どもであり、その他の子どもはコラガ族より高いカーストに属しています。しかしながら、ママタが学校に通っていた時に経験したような差別を受けることは全くありません。これは、ママタや他のコラガ族のコミュニティの女性たちが作り上げた、様々な物事を可能にするための環境のおかげなのです。



政府が運営するセンターのコラガ族の子どもたち